

夏の足音

全国高校野球
茨城大会を前に

〇4〇

昨夏の茨城大会後から今年3月まで、小瀬の選手はたった一人だった。野球部を守り続けた3年の鯉沼翔汰主将(17)は、黙々と練習を続けながら部員集めに奔走した。「単独で出場したい」という強い思いが通じ、助っ人や女子部員を含め仲間14人とともに大舞台に立つ。

外野まできれいに整えられた土のグラウンドは、白球を追いかける部員たちの声で活気にあふれていた。「先輩の姿を見ると、夏に絶対勝ちたいという

小瀬・鯉沼翔汰主将



後輩を指導する小瀬の鯉沼翔汰主将＝常陸大宮市上小瀬

単独出場へ強い思い

緒に引退しようかな」。そんな考えが一瞬頭をよぎったが、先輩たちから引き留められ、同学年の女子マネージャー・佐藤心愛さん(17)のサポートも受けながら練習を再開した。平日は、堀米厚監督(45)とキャッチボールなど少人数でできる練習が中心。時には佐藤さんに守備をしてもらい、打撃練習にも取り組んだ。堀米監督は「逃げようと思えば逃げられる環境でも、毎日必ず練習に来ていた」と目を細める。練習の合間を縫って、部員集めを欠かさなかった。オフの毎週水曜日は、連携型中高一貫校の特性を生かし、母校の常陸大宮市立明峰中の練習に足を運び、先輩たちと接して勧誘を続け

た。地道な活動が実り、今春に女子を含む8人の新入生が入部。助っ人を借りて単独出場した春季大会で、試合は敗れたが、1年生が適時打を放つなど奮闘した。鯉沼主将は「諦めずに練習を続けてきて良かった」と充実感を漂わせる。団結力をさらに深め、いよいよ本番が目前に迫る。「共に頑張ってきたみんなと1勝したい」。応援や練習の手伝いなどをしてくれた地元の人たちへの恩返しも、勝ちたい理由の一つだ。特別な思いを込めた集大成の夏に向け、「一日でも長くこのチームで戦う」と誓う。

(寺門蒼生)